



さ え き だ い す け  
**佐伯 大輔**

大阪市立大学  
都市防災教育研究センター  
兼任研究員  
文学研究科准教授

日本では、ここ20数年という比較的短い期間の間に、甚大な被害をもたらすような大災害が何度も起きています。人間は経験から学習する能力が高い動物ですので、災害を経験することで、身を守る方法を獲得してきたと考えられますが、それはどの程度達成できているのでしょうか。2013～2014年に大阪市立大学都市防災教育研究センターが大阪市民600人を対象に行った調査によると、「災害に対して行っている備えは何ですか」という問いに対して、「備えていない」と答えた人の割合は、全体の35.6%であり、これは他のどの回答の割合よりも高いものでした(図1)。このグラフは、何らかの備えをしている人が、64.4%いることも示していますが、大災害を何度も経験している国としては、高くないのではないかと思います。

それでは、災害に対して備えている人の割合が低いのはなぜでしょうか。いくつかの原因が考えられますが、その1つに、大災害が生じるリスク情報の示し方があると思います。例えば、「南海トラフ地震は30年以内に70%の確率で起こる」と言われていますが、この情報を聞いて、「すぐに備えをしなければならぬ」と考える人はどのくらいいるでしょうか。このリスク情報が備え行動をとらせるのに効果的でないとしたら、それは、「70%という不確実性に加えて、「30年」という時間の長さ」に原因があるのではないかと思えます。多くの物事は、遠い先のことであるほど効力が弱まり、不確実なものと感じられます。リスク情報は正確であることが重要ですが、送り手は、それが人々にどのように受け取られるのかを考える必要があります。

備え行動の割合が低い他の原因として、自らが大災害を経験していないことが挙げられます。ある研究では、大災害を経験した人はそうでない人に比べて、その後の備え行動の割合が高いことが報告されています。このことは、同じ国で起こっている災害であっても、自分が経験していなければ、その知識を活かすことができない可能性を示しています。

最近では、地域や学校等で防災教育が行われていますが、効果的な防災教育を実現するには、他人(昔の人も含めて)が得た災害についての知識を、自らの防災行動に役立てることができるよう工夫が必要です。

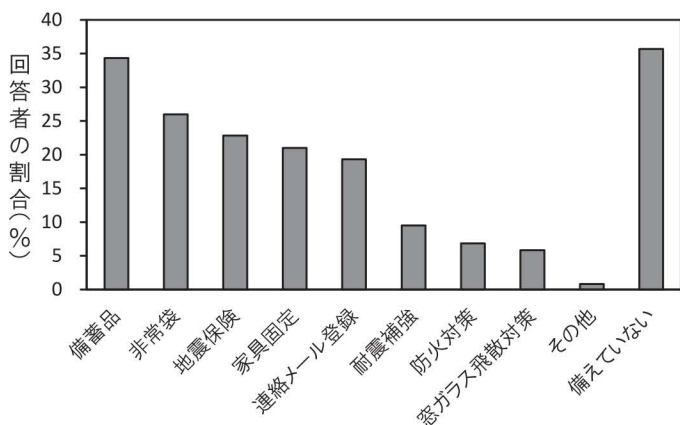


図1. 災害に対して行っている備えは何ですか？